

# 徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

田代一葉

## はじめに

『万葉集』以来、和歌の世界は歌人の一定数を女性が占め、個性的な名歌も多く詠まれてきたが、その女性歌人の公的な活動には空白の期間があった。小山順子氏は「室町時代の女性歌人たち」（注1）において、勅撰集の終焉が室町期における女性歌人の衰退と関わることを指摘している（注2）。

その影響は、時代が江戸に移ってから長く続き、享保十七年（一七三二）正月二十四日の禁裏御会始まで禁裏での女性歌人の出詠が途絶え、しかし以降は断絶がまるでなかったかのようにならぬように女房の詠進が再開していることを、坂内泰子氏が「近世和歌御会における女性の詠進復活に関する一考察」で明らかにされている（注3）。

ところで、近年、近世期のとりわけ宮中の女性歌人についての注目が集まっている。その例としては、大山和哉氏の口頭発表「近世中期堂上歌壇における女性の活動―同志社大学蔵二条家文書の和歌関連資料を手がかりに―」（注4）や、盛田帝子氏の口頭発表「光格天皇と女性歌人」（注5）などが挙げられる。

さて、本稿では、江戸城大奥に住まい、歌道家から添削を受け、和歌活動に熱心に取り組んだ七代将軍家継の生母月光院の和歌について取り上げたい（注6）。後述するように、冷泉家の添削などからも月光院は一定以上のレベルの歌詠みであったようであり、この時期の大奥歌人のモデルとして考えることもできそうである。

加えて、冷泉為村が記しているように、月光院は桜町天皇の御代に作られるはずであった勅撰集（実現はしなかった。このことについては別稿にて詳しく述べたい）の作者の列にも加えられていたようで、その歌集『車玉集』を繕くことで、一例ながら江戸時代の勅撰集が、当代の女性歌人に求めた和歌の傾向やレベルをある程度知る手がかりになるのではないかと思われるのである。

以下に、歌人月光院の人物像と、諸本について簡略に解説した上で、『車玉集』（内閣文庫蔵本）の翻刻本文を掲出する。

## 一、月光院の人物像と諸本について

### 1. 月光院の人物像

月光院の人物像については、虚実入り乱れているところもあり、実態に迫ることは本稿では難しい。これについての詳細な先行研究として、松尾美恵子氏「将軍生母月光院をめぐって」（注7）がある。また、月光院の和歌や学問への情熱については、『徳川実紀』「有章院殿御実紀付録」が筆を尽くして記述している（注8）。

まずは月光院の生涯を整理された松尾氏の御研究に導かれつつ、「月光院殿御年譜」（徳川林政史研究所保管徳川宗家文書「月光院殿御年譜 故諺記」のうち）を用いて概観してみよう。

はじめに、その生年であるが、「月光院殿御年譜」では元禄二年（一六八九）、『徳川実紀』および「幕府祚胤伝」「以貫小伝」では貞享二年（一六八五）とわかれているという。両親について、『寛政重修諸家譜』などでは、父は勝

田著邑（もと加賀前田家浪人佐藤治部（次郎）左衛門といい、浅草唯念寺塔頭林昌軒住持となったのち、召し出され幕臣となる）、母は松平伊勢守家臣和田治左衛門某の女とあるが、月光院を「宇治茶師家来の娘」（『兼山麗沢秘策』）などとするものもあるなど諸説あるという。

名は、はじめおきよの方、のち左京の局と称した。諱は輝子、法号は月光院理誉清玉智天大禪定尼。江戸芝（現在の東京都港区芝公園）の徳川家の菩提寺で浄土宗の増上寺に眠る。

「月光院殿御年譜」によると、元禄十四年十三歳の時に、豊岡侯、新庄侯に仕えたのち、矢島太郎右衛門（のちの勝田備後守典愛）の養妹となつて、甲府藩邸桜田御殿の奥勤となり、綱豊（のちの六代将軍家宣）に仕える。宝永元年（一七〇四）、綱豊が叔父である五代将軍綱吉の養嗣子となり、名を家宣と改め、江戸城西ノ丸に移る。同六年の綱吉死去したのにもない、四十八歳で六代将軍に就任。同年、月光院が鍋松（のちの七代将軍家継）を出産する。正徳二年（一七一二）、将軍就任から僅か四年で家宣が死去、四歳の家継が相続し七代将軍に就任。一方で月光院は薙髪して従三位に叙される（この時から月光院と号す）。享保元年に家継が八歳で死去し、以降月光院は、夫と子の二人の菩提を弔いつつ、宝暦二年（一七五二）に薨じた。没年齢は、「月光院殿御年譜」の生年で換算すると六十四歳、『徳川実紀』などでは六十八歳となる。そして、その二年後に、後述する月光院の家集『軍玉集』が完成している。

月光院に関しては、江島事件や側用人間部詮房との艶聞など、江戸時代当時から現代に至るまで醜聞めいた記述が散見され、大奥の風紀の乱れを代表するような人物として取り上げられることもある（注9）。

一方で、松尾氏も指摘するように、『徳川実紀』の記述は、月光院を将軍の生母として理想的な母親であり、教養溢れ、遊技にも通じた女性として賛美している。

では実際にどのように描かれているのだろうか。

最初に、学問や文事についての記事をやや長文になるが『徳川実紀』「有章院殿御実紀附録」(注10)から引用してみる。

月光院殿は、当代(引用者注 家継のこと)の御生母におはして、①御性質淑美に婦道を得させたまふのみならず、総て何事も敏捷にましましける(傍線、丸数字引用者。以下同)。公(引用者注 家継のこと)を設させ給ひしのちは、②幼主を輔育したまはんに、御みづから学ばせたまはでは、その功なし得がたしとて、内政の暇、つねに螢雪をあつめ、和漢の典籍をひもとき、御遊の折にも、御前にて文よみて御間にそなへ、ゆく／＼天下の機務をしらせたまふべきことゝも、聞えあげ給ひければ、公にものち／＼は、何ばかりの賢君明主ともならせ給ふべきに、天齢をかし奉らで、世を早うしたまひしは、おしみて猶あまりある御事なり。

抑、和漢古今の先蹤を案るに、主幼く国危きときは、必ず宰臣の政權を弄るか、あるは女主の威焰を恣にするためし、いと多かり。当代御継統のはじめ、老臣の輩、先朝の遺令をまもり、しば／＼善政を施行はれ、内にはかゝる賢母のおはして、宮闈の間も整肅にして、敢て女謁の行はれざりしは(波線引用者)、遠く古今に超過せりといふべし。

かつ③当代の夙慧におはしませしけるは、全く御生母の淑明なるよりいではべることなれば、いま、月光院殿の御遺事をついで、御付録の末につゞり奉るにぞ。(月光院殿御事略)

①では、貞淑でつましく、女性として守り行う道をわきまえているだけでなく、何事においても理解や行動が素早く飲み込みが早いことが記され、②では、幼くして將軍職を継承した家継のために、奥向きの切り盛りのかたわら、寸暇を惜しんで自らも勉学をし、家継に対してもゆくゆくは天下の重要な政務を行うので学問に精進すべき事な

どを申し上げていたので、どんなにか賢明な君主になれるはずであったのに、夭逝してしまったのは非常に惜しまれることである。月光院自らが幼い將軍を學問修得の面でも他人に任せきりにせず、自ら率先して行い補佐していたことがうかがえる。③に関しては「当代の風慧」、つまり、家継が幼児の頃から利発であったことが、「全く御生母の淑明なるよりいではべること」と述べていて、手放して月光院を讀えている。「有章院殿」(家継)の御実紀付録であるので、家継の生母である月光院の事跡を顕彰する目的があるのは首肯できるが、父である將軍家宣を置いて、母親にこれほどの贅辞を贈るのは、なにか考えがあつてのことなのだろうか。

また、波線部のように、大奥には月光院のような賢母がいて、静肅で秩序が乱れることもないとの一文もあり、母としてだけでなく、將軍家を支える重要人物としての横顔も描かれている。

幼くして將軍に就任した我が子を、將軍として立派に育てるべく、自らも學問に熱心に取り組んだ月光院であつたが、家継を亡くしてからも、その情熱は衰えなかつたらしい。

尼公、ひろく和漢の書にわたりたまひしうちにも、くりかへし見給ひしは、『つれぐ草』、『吉野拾遺』、『六百番歌合』、常に口ずさみたまひしは、清少納言が『枕草紙』、漢籍は『四子』、『古文真宝』前後集なり。また真言奥秘の教をもき、明らめ、梵文をもみづからか、せたまひしとぞ。

(萱堂聞書)

月光院に仕えた女性の文章から、月光院が和漢を問わず何度も読み返し、口ずさんでいた書の名前があげられ、さらに真言密教の奥秘をも識り、梵字も書いたということも知られる。

そのことは、『徳川実紀』宝暦二年九月十九日の卒伝に、

(前略)もとより微賤より出させ給ふ御身なれ共、万に才かしこくおはしまし、文学にさへ心をよせ、常に典籍を繕給ひ、わけて四書古文をば、御側をばはなさる、事なし。殊に和歌をたしなみ給ひて、冷泉大納言為久卿の

点削を乞給ひしが、秀逸あまたよみ出給ひ、御集も今に伝はれり。御筆は尊円親王の風を慕はれ、京あはた山の隠士三休子といへる者に、御手本臨本を奉り、また神道を学び、晩に密教を崇び、靈雲寺の比丘に帰依してその奥秘をさとし給ひ、かたはら楊弓、双六、碁、将棋等の遊技までも、すべてよくさせたまはずといふ事なかりしとぞ。

とも記されていて、和漢の書を読み、和歌を嗜み、書道に通じ、神道や密教をも究めようとし、遊技まで得意とした、何でもこなす多才さと、それぞれを深く極める熱心さがうかがえる。

続いて、和歌については、『徳川実紀』「有章院殿御実紀附録」に、

尼公もとより和歌をよくしたまひ、冷泉為久、為村両卿の添削を乞給ひしとぞ。世うつり時かはりて後、「老後述懐」といふ題にてよませける。

かく計り老となるまでうき度にいけらん身とは思はざりしを

さしもいみじき幸おはしけれど、前朝にも、当代にもしばしが内に後れたまひ、かひなき御身のほどをのべさせ給ふぞ、いとあはれなれ。

かくれたまひてのち、遺命により年頃よみ置き給ひし詠草どもを、中納言為村卿の許にをくり下されしかば、卿そのうち殊に調たかく趣あらたなるもの三百首ばかり撰みいで、『車玉集』と名づけ、家の文庫にひめ置ける。内々やんごとなき九重の奥ふかき御前わたりに聞えあげしかば、もしのちく／＼撰集の沙汰もあらば、三位尼とてこそ、入らるべけれど仰ありしとぞ。

(車玉集<sup>マツ</sup>端書)

との記述がある。『徳川実紀』収載の「車玉集端書」と『車玉集』などに収録された「車玉奥書」は、内容が異っている。「車玉集端書」は内容が短く単純化されているのと、書き手が違うこと(「車玉奥書」は為村、「車玉集奥書」

は第三者)から、『御実紀』にあわせて改編したものか(「車玉奥書」については「二: 翻刻」参照)。

ところで、月光院が冷泉家の門弟となったのは、『車玉集』に添えられた「車玉端書」に、「享保十九年」とあり、これは月光院が五十歳(『徳川実紀』など)または四十六歳(『月光院殿御年譜』)の時にあたる。冷泉為久が亡くなるのは寛保元年(一七四一)なので、為久からの指導は没するまでの七年前後続き、引き継いだ為村の指導は月光院が没する宝暦二年まで続いたと考えられる。「尼公もとより和歌をよくしたまひ」とあるので、冷泉家に入門する以前から和歌を嗜んでいたことは想像に難くないが、歌道家の添削を受けられるということは將軍の生母であっても名誉なことであつたろうし、学芸に熱心に打ち込んできた月光院はより一層歌道に精進したことだろう。

ここで「撰集の沙汰」にも簡単に触れておきたい。これについては、関白一条兼香の日記『兼香公記』の元文三年(一七三三)十月十九日条に、京都所司代土岐頼稔と対面した際に、頼稔から伝えられた八代將軍徳川吉宗からの言として、

歌道達人有之者、自関東乍少々可有心附之由、仍不私事猶書付以武家可令送之由所々、又撰集之事申之。

(東京大学史料編纂所のデータベースによる)

とあり、後に桜町天皇にも奏上して、冷泉為久ら当代随一の歌人が撰者として選ばれた形跡がある(注11)。

桜町天皇の代に、勅撰集編集が企図されていたことを示す一文で、約三百年の空白期間を経て編まれるはずであったが、実現を見ることはなかった。

なお、月光院は八代將軍徳川吉宗と気が合い、年始の挨拶は話が尽きることなく長時間に及んだという(注12)。お互い好学の気質があることによるからなのであろう。今回の勅撰集編纂については、吉宗が朝廷側に持ちかけたものであるため、吉宗が昵懇であつた冷泉家にはかり、月光院を推挙し、歌の内できばえのよい二十八首(あるいは

二十五首）が観覧となり「三位尼」の名を賜ることになったのではないか。

ところで、天理大学附属天理図書館には、『賀茂真淵応要稿抄』（91021439633。旧竹柏園文庫蔵。）が所蔵されており、これは真淵の『応要稿』の中から、月光院との問答を抜き書きしたものである。月光院は歌道家から添削指導を受け、二条派の和歌を詠む一方で、国学者であり歌人の賀茂真淵に対しても興味を持っていたことがうかがえる。『賀茂真淵応要稿抄』には年次は記されていないものの、『県居翁消息応要稿』（賀茂真淵記念館、144）には「乙丑五月」とある。二人が存命中の「乙丑」は、延享二年（一七四五）であることから、真淵が田安宗武に仕える直前の、江戸に出て名も知られ実力を上げてきた時期にあたる。『賀茂真淵応要稿抄』には「月光院の御前に向せ給ふに答奉る 賀茂真淵」と内題があるので、直接対面してのやりとりであったことも知られる。先に述べたように、月光院は学芸に関する広範な知識と旺盛な向学心を持っていることから、堂上の歌学のみにとどまらず真淵との対面に至ったものであろう。

『応要稿』自体は、伊勢白子里の村田橋彦が安永五年（一七七六）頃にまとめている。

## 2. 諸本について

月光院の家集については、『車玉集』や『月光院集』、『月光院様御詠草』などの名称があるが、全て写本で伝わっている。

今回の調査において存在を確認することのできた月光院の家集や詠草などについて、まず掲げ、内容を抑えておきたい。



- (1) 『車玉集』写本一冊 内閣文庫蔵 昌平坂学問所旧蔵 (201-0628)
- (2) 『三位尼公御詠歌』写本一冊 内閣文庫蔵 (201-0630)
- (3) 『月光院集』写本一冊 天理大学附属天理図書館蔵 (911.26-189)
- (4) 『月光院様御詠草』合写の内 刈谷市立中央図書館村上文庫蔵 (6252)
- (5) 『月光院殿御歌』『富士の煙』写本二冊の内 西尾市岩瀬文庫蔵 (89-8)
- (6) 『月光院殿御詠歌』『視聴草』七集之八の内 (写本) 内閣文庫蔵 (217-0034)
- (7) 『月光院様御集』写本一冊 内閣文庫蔵 和学講談所旧蔵 (201-0624)

(3) 『月光院集』および(4) 『月光院様御詠草』については、紙焼資料を利用した。

なお、『女流著作解題』(女子学習院、一九三九年)に、月光院の著作として『東玉集』一冊が挙がっているが(国書データベースより知り得た)、あるいは『車玉集』の誤記ではないかと推察される。

以下、各書の特徴を簡単に概説してみたい。

- (1) 『車玉集』写本一冊 内閣文庫蔵 昌平坂学問所旧蔵 (201-0628) 縦26.5cm × 横17.9cm  
表紙は水色で、本書全体に水ぬれ、虫捐多。表表紙の題簽には「月光院様御詠歌 全」とあり、さらに別筆による「車玉集」と二つの題名が記されている。元表紙には「車玉集」とあり、内題は「月光院様御詠歌」。  
本紙全三〇丁。

最初に「冷泉長点」とある添削の付された二十八首があり、「これは内の選集の御沙汰ある間、長点になり

し、又は得意の御詠を遣はされおかるべきよし、冷泉家より申す時につかはされたるなり」とある、月光院にとつて最も評価された歌、あるいは自讃歌である。ほかに、「拾遺仮名題」として春二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、恋二十首、雑二十首の計百首と、「堀幸端判」（堀幸については未詳）とある二十首（ただし添削なし）、五十五首、十四首などあり、総計二百十七首（重複二首、全数二百十五首）の歌を収める。

最後の十四首には「是ハ御自染御短冊家蔵」「これは時々当座短冊にしるしあり」と注記のある歌も見える。それに続いて、冷泉為村による「車玉端書」と「奥書」（宝暦四年秋）があり（注13）、末尾には「有章院殿御実母 月光院殿 於喜世之方 勝田備後守典愛娘 宝暦二年九月十九日逝 葬増上寺」と月光院の略歴が記される。

(2) 『三位尼公御詠歌』写本一冊 内閣文庫蔵 (201-0630) 縦 26.5cm × 横 18.9cm

表紙は香色地に茶の細い横線模様。料紙は光沢のある薄い斐紙で、全体に水ぬれがひどく、シワが寄っている。外題・内題ともに「三位尼公御詠歌」。全三十九丁。和歌は、「冷泉長点」とある「ねざめのこひに」から始まる二十八首があり、末尾に「これは内々に撰集の御沙汰ある間（下略）」と『車玉集』と同文の添え書きがある。

続く部分に「拾遺仮名題」の百首歌、「元文元年辰九月十八日」から続く堀幸端判の二十首、「御当座」五十五首と、それとは別の「御当座」十四首で構成され、「総計二百十七首 重複二首 全数二百十五首」が本編。「車玉端書」と「奥書」を備える。

(3) 『月光院集』写本一冊 天理大学附属天理図書館蔵 (911.26-189) 〈原本未見〉

『月光院集』の書名は外題によるもので、見返しには「月光院理譽清玉智天大禪定尼 文席御寵女有唐御母堂勝田典愛姉 宝曆二<sup>甲</sup>九月十九日卒去 芝佛心院」と月光院の略歴が記される。全三十七丁。一丁目の遊紙の裏には、本文と同筆で「此三百有餘首の御詠草は、ことに御秘蔵にて何れも御点の濟候あまたの御歌共のうちに、これを又御書出し候其中にも、またく勝れ候御秀逸に御点を御のぞみ被遊候御歌共にて御ざ候 梅さき」とあり、「梅さき」という人物が編集したものと考えられるが、未詳。月光院の側近く使えた和歌の教養のある女性か。

本文は、四季恋雑の部(春六十五首、夏三十四首、秋五十六首、冬四十七首、恋七十六首、雑六十五首)計三百四十三首に続き、「左二十五首」ことに為村卿御褒美の御うたにて候」とあり、「従三位藤原輝子」と名が記された二十五首と為家の添削が収められている。二十五首は、四季・恋の歌十四首、「かな句題のうち」六首、「五首題」五首で、末尾には「右の外にもあまたおはしまし候へども、忘れ申し候。」と記されている。「忘れ申し候」の一文にも、月光院との近さを感じられる。

書写奥書に「文政二<sup>己</sup>卯年十月十九日以深田氏藏書写之 大江信貞」とある。深田氏も大江信貞も未詳ながら、本文の文字が、線の強弱をはっきりさせているという点で、定家様を意識した書きぶりで、書とともに大江信貞は二条派の和歌を学ぶ人物であったかとも考えられる。転写により集が複数の人々に享受されていたこともうかがえる。

(4) 『月光院様御詠草』合写のうち 刈谷市立中央図書館村上文庫蔵 (6352) 〈原本未見〉

徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

表紙に月光院の略歴の書付貼付。見返しに「梅さき」と署名のある書付「此三百有余首乃御詠草は（下略）」（3）と同文）があり、本文は、内題はなく、春六十五首、夏三千四首、秋五十六首、冬四十七首、恋七十六首、雑六十五首（計三百四十三首）のあとに、「左二十五首、殊に為村卿御褒美の御うたにて候」「従三位藤原輝子」（月光院のこと）とある二十五首（四季・恋の歌十四首、「仮名句題のうち」六首、「五首題」「五首」には為村の点がある。末尾には「右の外にもあまたおはしまし候へ共、忘れ申し候。御詠三百六拾五首」（実際は三百六十八首）と記されている。全四十七丁。

(5) 「月光院殿御歌」『富士の煙』写本二冊の内 西尾市岩瀬文庫 (898) 縦 23.0cm × 横 16.5cm

当該資料は、『徳川実記』に先駆けて家康および徳川家の詩歌に注目し編集された、近藤守重編の『富士の煙』に収録されたもので、編者の自筆本。全八十三丁。近藤守重は長崎奉行手附出役や松前蝦夷御用取扱などを歴任し、蝦夷地を探検し択捉に「大日本恵土呂府」の標柱を立てた人物としてよく知られた人物で（注14）、御書物奉行の職にあつた時に編集し、文化十四年（一八一七）四月十七日付けの序が備わる。

『富士の煙』には、徳川家康から吉宗までの八代の将軍と、その正室や側室などの和歌、漢詩、連句など約三百五十首が収められている。そのうち、最も多く和歌が収録されているのは家光の四十三首であるが、それに続くのが月光院の二十九首で、その次が綱吉の十三首であり、後宮の部では群を抜いて多い（注15）。このことは、前述したように勅撰集の撰集資料として、月光院の歌がまとめられていたことにより、それが直接紅葉山文庫に収められていたとまではいえないかもしれないが、書物に日々接する職務にあつた近藤守重の目にとまったのではないか。歌集としてまとまっていたことで、『富士の煙』には二十九首が収められていると考

えられる。

本文は、菊に添えた贈答歌一首と、「勅撰の御沙汰ありし比、冷泉家長点の歌、廿八首中納言為村卿の許へつかはされける」とある二十八首、末尾に（一）『車玉集』にある冷泉為村記の「車玉端書」を要約した一文が付されている。

(6) 『月光院殿御詠歌』『視聴草』七集之八の内（写本） 内閣文庫蔵（217-0034）（注16）

標題は「月光院殿御詠歌」（注17）とあり、「冷泉長点」と注記があつて、長点と添削が付けられている。「ねざめのこひに」からはじまる二十八首が収められている。今回確認できた月光院の詠草の中でもっとも数が少ないが、『車玉集』などに「これは内の選集の御沙汰ある間（下略）」とある歌と一致する。また、（一）の『車玉集』同様に、『車玉端書』と『奥書』が末尾に備わる。全七丁。『視聴草』は江戸時代後期の幕臣宮崎成身が編集した雑録で、全百七十六冊。

(7) 『月光院様御集』写本一冊 内閣文庫蔵 和学講談所旧蔵（201-0624） 縦23.9cm×横16.3cm

表紙は香色。全二十四丁。歌は、春四十五首、夏三十一首、秋四十六首、冬二十九首、恋百三十首、雑七十五首の三百五十六首。

表記の仕方が他書と異なり、最初に四季・恋・雑の題の一覧があり、和歌は、題の下に和歌が一首一行書きで記されていて、類題集のような体裁を取る。端書や奥書などはない。

以上の七種の月光院に関する家集や詠草類から判明したことについて、記していく。

一つめは冷泉為村の添削のある「これは内の選集の御沙汰ある間（下略）」とある二十八首が最も重要な歌であり、類題集のおもむきを持つ内閣文庫蔵『月光院様御集』以外ほどの集にも一つのまとまりとして収録されていることである。

その題を『車玉集』の表記、順番で列挙すると、

寝ざめのこひに	夏懐	夏思	寄籬恋	寄滝恋	寄社恋	山家夢	月照流水	一葉散林
夜思花	社頭祝君	老述懐	あきにあきそふ	苗代有遅速	蛙声幽	枕辺聞虫	花	郭公
月 雪	述懐	やまほと、ぎす	しのぶることの	かつみる人に	あはでとしふる			

恋関（二首） 月照雪

で、二十七題の内、恋の歌の占める割合が高いことがわかる。月光院としても、恋の歌に秀でた歌人であるとの自負があり、さらに為村がお墨付きを与えたということなのであろう。

「梅さき」の編になる集（3）天理大学附属天理図書館蔵『月光院集』、（4）刈谷市立中央図書館村上文庫蔵『月光院様御詠草』では、「恋関（二首）」「月照雪」がなく、二十五首であるという違いもある。

二つめとして、（1）（2）のように、最初に、撰集資料として冷泉家に提出した二十八首があり、「拾遺仮名題」百首、「堀幸端判」二十首、五十首一卷、十四首と続く全二百十五首の集と、（3）（4）のように「梅さき」編で、四季恋雑の部（春六十五首、夏三十四首、秋五十六首、冬四十七首、恋七十六首、雑六十五首）計三百四十三首のあとに、「従三位藤原 輝子」の名での冷泉家提出歌二十五首をおく集（全三百六十八首）との二つに分けられることである。

その他、叢書に収められたもの、徳川家の歌集に収録されたもの、類題集的に編集されたものがある。

三つめは、「車玉端書」、および「奥書」の存在で、(1)、(2)、(5) (端書の要約のみ)、(6) に添えられている(「梅さき」編の集にはない)。和歌本文もさることながら、この二つの文章の内容は書き留めておくべきものとされて、各種の集に採録されることになったのだろう。さらに言えば、この端書と奥書があるものが、為村撰の月光院家集の系統にあるもの、あるいはそれを抄録したものということなのである。

### 3. 「車玉端書」「奥書」について

その「車玉端書」と「奥書」についても簡単に述べておく。

「車玉端書」によると、月光院は享保十九年に冷泉家に入門し、以降は京都と江戸の間で常に書簡のやりとりをする。ことで和歌を学んでいたこと、宝暦二年秋の逝去に際し、月光院は遺言として自らの死後は詠草や和歌に関する書付などは全てなき物にして欲しいと申しつけていたことが知られる。その詠草類は月光院に仕えていた女房らにより取り集められ、為村の元に送られている。

それらを写し取り冷泉家の文庫に収め、自筆詠草については、「弟の僧宥澄僧正の仏場にてひそかに灰になし、思ふゆへあれば月光菩薩の尊像をその灰にて作り、三年の御忌とひたてまつらん」と考えていた。為村の弟は、仁和寺真乘院の僧宥証(宥澄は誤記)。三回忌までには二百余巻に及ぶ詠草の書写が間に合わず、為久添削分のみ写して仏像を作り供養したという。為村の分は、後に書写して灰にし、仏を造って回向するとある。

この家集名については、「御いみ名の字によせあれば車玉とするしつけ侍る。車の光といふ心なり。」とあるように、生前の月光院の諱「輝子」の「輝」の字が「光」と「車」に分けられることにちなみ、『史記』巻四十六「田敬

仲完世家」にみえる、楚の卞和が見出した、車の前後十二両ずつ照らすほどの光を持つ名玉「照車玉」（照車の玉）から名付けている。

また、月光院が和歌に非常に深い執心があることから、為村が「やんごとなき御前」（桜町天皇か）にてこのことを申し漏らしたところ、勅撰集を編むことがあれば、「三位尼」と記すべきとおっしゃったという。撰集を見ることはかなわなかったが、月光院が存命中に期待していらしたので、せめてその御霊を慰めるためにこの端書を書いたとある。勅撰集の作者となるという歌人としての悲願はかなわなかったが、月光院というたくいまれな歌人の存在を伝えようとこの端書は著されたのだ。

なお、自ら御清書された和歌三冊が別にあるとも記されていて、人知れず冷泉家の文庫に永く保管されることを願ったのだろう。自らの家集を編んでも（自撰、他撰を問わず）公にすることなど思いもよらないのが、当時の堂上派に属する女性歌人たちの一般的な考えであったようである。

「奥書」についても触れておく。

宝暦四年と思われる六月十九日、為村の弟、仁和寺真乘院の僧有証僧正のもとで、ごく限られた人数で和歌を灰になし、その間、絶えず経を読む法要が行われた。為村は供養文を認め、月光院の名とおなじ、月光菩薩を造仏供養として一体作り、兼源院尼（未詳）のもとに安置して供養したとある。

末尾にある「宝号をいたゞく七首」では、菩薩の名を、それを各首の一文字目に置いているはずのだが、続けて読んでみると「く・は・く・う・ほ・さ・ち」とあり、「虚空（蔵）菩薩」なのかも考えられ、疑問が残る。どのような意図があるのかは不明ながら、この度造立した「月光菩薩」を詠んでいないのは確かである。

以上、為村による二つの記述から、月光院の和歌活動や、詠草や浄書本に対する考え方、そして冷泉家と月光院の



交流についても明らかになった。

このような冷泉家の月光院への死後にまでおよぶ厚遇は、將軍の生母であることによる敬意はもちろんながら、熱心な弟子である月光院の和歌に対する関心があり、そしておそらく月光院が冷泉家に対する支援を惜しまなかったことに対しての、報恩の念もあつてのことなのであろう。

ともあれ、為村の功績によつて、歌人月光院の詠歌と人となり、後世までも伝えられ留め置かれたのである。

【註】

- 1 『中世文学』第六十号、二〇一五年六月
- 2 同氏「卿内侍・姉小路済子の文学活動 室町時代末期の後宮女官と文学」〔『女子大國文』一七三号、二〇二三年九月〕においても、消えゆく女性歌人の活動について述べられている。
- 3 『国語と国文学』第六十六卷第三号、一九八九年三月
- 4 令和四年和歌文学会関西七月例会（於同志社大学今出川校地／オンライン会場、二〇二二年七月二日）の口頭発表（のちに「〈資料紹介〉同志社大学蔵二条家文書の女性筆写資料」『同志社国文学』第九十八号、二〇二三年三月）。
- 5 日本近世文学会二〇二二年度秋季大会（於同志社大学／オンライン会場、二〇二二年十一月六日）
- 6 落飾して月光院と名告る前の事績についても含まれているが、便宜上、月光院で統一する。
- 7 『金鱗叢書 史学美術史論文集』第四十三輯、二〇一六年
- 8 本来であれば『徳川実紀』の元となった現資料に当たるときであるが、大奥内の内情を示す資料であるためか、

管見の限りでは「車玉端書」をのぞき確認することができなかった。今回は『徳川実紀』が描いた月光院像を確  
認することに重きを置き、史料の探索については今後の課題としたい。

9 『三王外記』『章王外記』など。

10 有章院は、七代將軍家繼の法号。本文は、『徳川実紀』第七篇（『新訂増補国史大系』第四十四卷新装版、古川弘  
文館、一九九九年）によった。

11 撰者となったと考えられる四名（中院通躬、冷泉為久、烏丸光栄、三条西公福）に対し、四季名所和歌（後に屏  
風歌となった）を詠ませたことについては、拙稿「近世中後期の堂上歌人による名所障子歌の制作について」  
（『近世文藝』第一一三号、二〇二一年一月）で述べた。

12 注7松尾氏論文による。

13 冷泉為村の詠作を集めた石野広道序の『止静心院殿御藻』十七冊（十八〜二十冊欠、国文学研究資料館〈石野家  
本〉、S2-1661〜17）の中にも「車玉端書奥書御追悼納経奥なかうた」として第五冊一冊分をあてる。本書には、  
他本にない長歌が末尾に収録されている。

14 谷本晃久氏『近藤重蔵と近藤富蔵 寛政改革の光と影』日本史リブレット人58、山川出版、二〇一四年

15 拙稿「近藤守重編『富士の煙』にみる徳川將軍家と詩歌―家康の和歌を中心に―」『徳川將軍と富士山』、こと  
は社、二〇一九年

16 宮崎成身編『視聽草』第六卷（史籍研究會編『内閣文庫所蔵史籍叢刊』特刊第二、汲古書院、一九八五年）によ  
る。

17 「様」を消して「殿」と左側に書き付けてある。

## 二、翻刻

### 【凡例】

- ・『車玉集』（写本一冊、内閣文庫蔵、昌平坂学問所旧蔵〈201-0628〉）を底本とし、以下の方針で翻刻を行った。
- ・異体字、旧字などは現行の字体に改め、句読点、濁点を補った。長点については、「\」で示した。平仮名のおどりは字は、一字の場合は「ゝ」、「ゞ」、複数の場合は「く」、「漢字一字の場合は「々」に改めた。
- ・虫損による判読不可の部分（□で示した）については、『三位尼公御詠歌』（写本一冊、内閣文庫蔵〈201-0630〉）により、判読不可の箇所（□）の右側に（ ）で括って小字で記すことで補記した。
- ・『車玉集』で意味が判然としないところは、参考として『三位尼公御詠歌』の本文を\*で傍記した。

『車玉集』（内閣文庫蔵 201-0628）

### （表紙）

車玉集

月光院様御詠歌

全 （題簽）

### （元表紙）

車玉集

徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

(本文)

月光院様御詠歌

冷泉長点

寝ざめのこひに

／＼ふかきよの寢覚の恋ぞうかりける又も逢ひみぬ夢のなごりに  
よろしくおもしろく候

夏懐

／＼うつるべき心の色に夏山のはな、き木々に風を社おもへ  
よくとゝのひ候

夏思

／＼なつぞうき夕の空を待わびてあひみる程はみじかよの夢  
ことよろしく候

寄籬恋

／＼うしやなどよるもこえじとへだつらん籬は夏の山ならなくに  
よろしく候

寄滝恋

／＼しらせばやたぎつなみだの水上はいはで心にわかかへるとも

寄杜恋

よくとゝのひ候

おもへどもいはで忍ぶのもりで世にうき名ちらすな露の下草

よろしく候

山家夢

山佰はひぢをまくらの心もてなるれば夢のうちもやすけき

尤に候

月照流水

すみまさるそらもひとつの秋の水みなぎるせゝに月をやどして

よろしく候

一葉散林

散ぞむる一葉の色に常盤木のならふ梢も秋やしるらん

優美に候

夜思花

あけぬまに散もやせんと思ひつゝぬればや花の夢にみゆらん

ぬればや花の艶にうるはしく候。小町の歌をとられたる宜しき上、

夜思花の心、賞翫あさからず候。

社頭祝君

徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

／＼万代とみとのゆふしでかけまくもかしこき君を祈る神がき

老述懐

／＼かばかりの老と<sup>な</sup>ずるまでうきたびにいけらむ身ともおもはざりしを

御再点

あきにあきそふ

／＼老の身の秋に秋そふ夕ぐれをおもひすて、<sup>と</sup>袂ぞ露けき

御再点

苗代有遅速

／＼まく種に早田おくてのかたわきていそぎいそがぬ賤がなはしろ

よろしく候

蛙声幽

／＼むもれ井のあるかなきかにみかくれてそこともわかず蛙鳴こゑ

幽字よくとゝのひ候

枕辺聞虫

／＼きゝわびぬひとりね覚のきりゝす鳴音なそへそ老の枕も

おもしろく候

花

／＼けふも又野山のはるの桜がり花より春<sup>花</sup>のかげにくらしつ

郭公

賞花の春行、かくあるべく候

／＼雨晴る、ゆふべの雲に鳴すて、山ほとゝぎすいづちゆくらん

雨後の暁景、尤おもしろく候

月

／＼さやけさの光をうふる秋風に雲のちりさへなかぞらの月

晴夜の明月、もの新候

雪

／＼松たけにつもるけぢめをけさ見れば思ひそいつるゆきのふること

雪中古事、ふかく感候

述懐

／＼千世かけてさかへむ和歌のうら波によするもくづはたのみこそあれ

(波の)  
 玉藻は

為村

やまほとゝぎす

／＼一こゑはさやかになれの月ならで待夜かさなる山ほとゝぎす

珍重々々

しのぶることの

／＼近けれどおもふふしだにえもいはでしのぶることぞ中のたけがき

徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

よろしく候

かつみる人に

／＼草の名のかつ見る人にしらればやあさかのぬまのそこの心を

よろしく候

あはでとしふる

／＼お(を)□じよにすむばかりこそ契なれあはで年ふるつらきながらも

珍重々々

恋関

／＼えぞこえぬあきかぜつらしかるかやの関の名きかばおもひみだれて

いつのまに越て逢ふべきひとふでのあとだにゆるせもじの関もり

両首ともよろしく候

月照雪

白妙の色もひとつに影さえて雪をみかける冬のよの月

よろしく候

右二十八首 一卷

これは内の選集の御沙汰ある間、長点になりし、又は得意の御詠を遣はされおかるべきよし、冷泉家より申す時につかはされたるなり。



春二十首

としたちかへる

／＼明てけさいづる朝日ものどかなりとしたちかへる春の契りに

やまもかすみて

こ、かしこ雪はこのれど野も山も霞て空のはるめきにけり

子の日のまつ

生さきのち世をちぎりてひきてうへむけふのねの日の松のふたば、

わかなつむべく

春の日に氷もとけて初若なつむべくみゆる野辺のさは水

なくうぐひすの

わがその、梅咲にけり木づたひて鳴鶯のやどりとるべく

さえぬる雪は

水のうへのあはときへぬる雪はげにつもらぬ春のならひみすらん

わかぎの梅は

咲初る若木の梅はおひ木にもまさる匂ひを花にふかめて

かきねのやなぎ

遠かたになびくみどりはしめおける賤が垣ねの柳かげかも

はるのあらたを

苗代の折すぐさじとますらをや春のあら田をうちかへすらん

はなみてかへる

あかざりし花みて帰るいへづとのかざしの秋に匂ふ山かぜ

ぬるともはなの

夕霧に袖はぬるともはなのえをかざして春の家づと□<sup>(E)</sup>せん

はなのたよりに

おもはずもさはれ来つる匂ひかなあるじはしらぬ花のたよりに

はなこそぬさと

手向山かすみの袖にちりかゝるはるの花こそぬさと見えけれ

ちりつむはなの

春□<sup>(風)</sup>□<sup>(も)</sup>ふきなわたりそ山川の水にちりつむ花のうきはし

はるのながめは

月のこる山もおぼるにうちかすみ春のながめはあけぼの、空

あさるきゝすの

若草のつまこひすらし<sup>(カ)</sup>かすむ野にあさるきゝすの声もこもりて

かはづなくなり

をのがすむ心えたりとはるのたを苗代水に蛙鳴なり

やへやまぶきは

えもいはぬ色に匂ひて咲花の八重山吹はつゆながらみん

きしのふちなみ

かげうつすいはねの松にさく花の木高くかゝる峰の藤なみ

とまらぬはるの

／＼けふのみとくれ行空の霞だにたちもとまらぬ春のわかれ路

### 夏十首

ころもがへうき

／＼なれきつるはるの名残のうつりがを思へば春の衣がへうき

さける卯の花

月影にまがへてさける卯の花は垣根斗ぞやみもさやけき

やまほとゝぎす

いつかはとまちしかひある一こゑも雲のかなたの山ほとゝぎす

あやめのくさも

□<sup>(悉)</sup>ながらかくるあやめの草もしれ五月の玉のながきためしを

徳川家継生母・月光院詠『軍玉集』の翻刻と解題

このさみだれに

雲はれぬこのさみだれにいつかたの山のしづくもをちまさるらん

なつのくさの

／＼ゆく人のあとふきわくる風だにもなつのくさのしげりそふころ

わがとこなつに

ちりなくて我とこなつにをきむすぶ花の籬(露は、)□□□らはじ

くさのほたるを

くるよの草の螢を玉とみてひろへば袖の露にとびかふ

かはべすゞしき

秋ぞともいはこそ浪のよせかへるかはべすゞしき袖の夕風

なごしのはらへ

いぐしたてみのうきことはみな月のなごしのはらへせぬ人ぞなき

### 秋二十首

あへるたなばた

かさねてもまどをにあへる織女の雲の衣はうらみはれしな

はぎかるおのこ

ぬれてちる露さへおしき秋の野のはぎかるおのこ心あらなん

あかつきつゆに

秋はなどねざめの床のうへまでもあかつきつゆにぬれんとすらん

あきかぜふけば

身にしみて秋風ふけばはな、がらなびく千草の露ぞこぼる、

しかのたちどの

よをさむみつま、ちわぶるさをしかのたちどのみねに秋風や吹

かりのつかひに

数みえて秋くる雁のつかひにはたが玉草をたぐへそめけん

はたをるむしの

草がくれなくねもあやに聞ゆるははたおる虫の露に住むらん

みねのくずはの

秋はてばひとりやかれむ人しらぬみねのくずはのうらみながらに

やまだのいねを

かりいほに露しく秋のよをかさねやまだのいねをかりやわぶらむ

やまのはの月

山の半の月まつそらは雲はれてまつばらとをくかけぞいざよふ

みやこのつきを

むかひゐてみやこの月を思ふこそあづまの空もすみまさるよは

そらゆくつきの

さやけしなくも、かゝめていく里の秋の空行月の光りは

つきはうきよの

山深み心も空にすむ月はうきよの秋をわすれてぞ見る

かたはれつきの

こゝろすむ秋の哀れはかげうすきかたはれ月の有明の空

あきにあきそふ

／＼老の身の秋に秋そふ夕ぐれを思ひすて、も袖ぞ露けき

はねかくしぎも

秋のよの深き思ひのかずそへてはねかくしぎも物やわびしき

よをながつきと

くれ竹のよをながつきとおもはずは思ひなき身のふしうからねば

きくのしら露

ぬれて折そでも千とせの秋やへんはらへば匂ふ菊の白露

もみちをわけて

枝かはすもみちをわけてをのれのみ秋ともしらぬまつの花かな

あきのかたみを

行秋のかたみを袖にをく露もあすはしもとや(結)びかふらん

冬十首

しぐるゝそらを

くもぢより冬来にけらし山風はけさはしぐるゝ空をしるべに

このはながるゝ

山河にしがらみかけよくれなるのこの葉ながるゝせゞの白浪

うすきこほりに

とぢ初てけさまたうすき氷にもかけひの水の音は絶にき

おしのはかぜの

いねがてにきけばかはもの霜はらふをしの羽風の音もさむけし

ねざめのちどり

浦波のあはれになくはなにごとをおもひねざめの千どり鳴らん

ふゆのよふかき

かきおこし冬のよふかきともなひにあたりはなれぬ閨の埋火

ゆきをたもとに

／＼神垣やしらゆふ花とふりかゝる雪をたもにかへすみや人

ゆきにこもれる

□<sup>た</sup>へずたつみねのけぶりも日へつゝ雪にこもれるすみがまの里

あじろのひをに

もりあかすうちの河風さゆるよはあじろのひをに身をやかこたん  
 はるのとなりの  
 やどごとにはるのとなりのいとなみもひまなくけふは年ぞ暮行

## 恋二十首

いはでものおもふ

忍ぶればそれともいはでもの思ふこゝろのうさをいかでしられん

みぬ人こふる

世がたりのそのあらましにおもかげも見ぬひとこふる我ぞあやしき

なみだをのごふ

せけばなをおつる涙をのごふとしてしほる、袖ぞほすひまもなき

ものおもふときの

あくがれてものおもふときのわがたまはつれなき人の袖にいらなん

あはでぬるよの

みせばやなあはでぬる夜のかさなればうらみもちりもつもる枕を

まつほどすぎて

こぬ人をまつ程過て有明の月のみそでをとふもつれなし

あらばあふよの



□<sup>③</sup>き身世にあらばあふよの行末を待えて絶るいのちともがな

ともちぎりし

もろとも契しまゝの中ならばありてつれなき物はおもはじ

わがなはたちて

思ひ河たへぬなみだの袖よりやわが名はたちてよにながるらん

いたづらぶしを

しげいとのいたづらぶしをなげきつゝとはぬ恨も幾世へぬらん

いゝはゝなたで

玉かづらかゝらましかばひたすらに思ひたへねどいゝはゝなたで

よるはこひしき

いつまでと身をうき波のよるくはこひしき床にうらみあかさん

しゐてもたのむ

おなじ世にあひもおもはぬうき人を我はしゐても頼むはかなき

おもひわづらふ

まれに来てことよき人のかねごとをまこといつはり思ひわづらふ

おもひのけぶり

見ずや人夕の空にたつ雲はかゝる思ひのけぶりなりとも

うきもつらきも

しかりとて人はうらみじとにかくにうきもつらきも身のとがにして

ねざめのこひそに

□<sup>(な)</sup>がきよのねざめのこひぞうかりけるまたもあひみぬ夢の名残に

よろしくおもしろく候

わすれぬひと

わけこしをわすれぬ人もある中にとはぬはつらきよもぎふの宿

なきてわかれし

鳥の音に鳴てわかれしきぬくの名残の袖をしたふ月かげ

つらきひとしも

われなど思ひたえなで世につらき人しもこふるいのち成らん

雑二十首

みねのしらくも

山風のふきたえぬれば消がてにおりしづまれる峰のしら雪

たにのむもれぎ

水かさにもさそひかねてや山河のきしねに残る谷のむもれ木

くだすいかだの

柚人のはやせの波にさほさしてくだすいかだのいとまなのよや

あしわけをぶね

よそめにはさはる斗りにしげりあふあしわけ小舟いかにこぐらん

あさかはわたり

かち人のあさ川わたりゆくと来と袖つく波のたちもとまらず

みぎわのたづの

千世までもともにすむべき池水になれてみぎはのたづのもろこゑ

まつとたけとの

□<sup>(巻)</sup>かへせぬ色はひとつに吹風もまつと竹との音ぞわかるゝ

とをきわかれを

／ゆくすゑもとをきわかれをいかにしてあすしらぬみに思ひたちけん

かさなるやまは

ちりひぢのつもりく／て峰も尾もかさなる山もいくよ成らん

やまこえくれて

けふいく日しらぬ海山こえくれてのこるたびねのうさをこそ思へ

くさのまくらに

一夜たゞかりねの草の枕には露こそむすべ夢は結ばず

いりあひのかねの

小初瀬やさびしさそふる入相のかねのひゞきに山風ぞふく

かゝみのかげに

むかひ見る鏡のかげにならひつゝくもる心をみがけどぞ思ふ

おひにけるみに

／＼とし月をなにゝくらしよの人にみえがたきまで老にける身ぞ

こゝのがさねの

みや人はいつもときは花ごろもこゝのがさねの袖もゆたけき

あまのはごろも

誰かみていはほなづてふことの葉をよに伝えけんあまの羽衣

はかなきよをば

□<sup>(あ)</sup>だしのやは□<sup>(か)</sup>なきよをば露のまと思ひ置身も消がてにして

ゆふしでかけて

／＼ねぎごとに神の心もなびくかとみとのゆふしでかけてかしこき

のりのみちにぞ

／＼いまはたゞ法のみちにぞ入にけるわしのみ山のあとを尋て

やをよろづよを

やを万代をおさめしるすべらきのとよあしはらの国ぞ久しき

右百首一巻

月光院様御詠歌

堀幸端判

元文元年<sup>辰</sup>九月十八日<sup>柿本  
影供</sup>

寄月神祇

さやけしとかみやよすがらみたらしのなみもかゞやく月をめづらむ

探題

祝言

あめつちの時したがへぬ君が代は恵みにうるふ四方の民草

十月十八日

関路落葉

吹こゆる風や木のはをさそふらん散ゆく末も白川の関

探題

野分

あかず見し花の数々おく露をいかに野分の吹しほるらん

霜月五日

徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

寄夢懷旧

なきかげのみとせの月日夢のまにすぎしうつゝはねてかさめてか

元文元年<sup>辰</sup>の霜月御庭の山の稲荷社

御奉納和歌

花手向

さほ姫のはなの手向か神のますいがきにかゝる花の白ゆふ

元文二年<sup>巳</sup>九月十八日 月次

秋祝

幾千世とさしてもいはじ久かたの月と秋との限りなければ

探題

関雪

ふじのねのあらしまばゆくふる雪に駒もすゝまぬあしがらの関

元文三年<sup>戊</sup>三月四日

懷旧

思ひきや世はしら露の草のはらはかなき程をいまとはむとは

郭公一声

一声に枕にそばだてあかすよをぬるとや思ふ山ほとゝぎす

羈旅雁

なれとまた旅のやどりや雁がねの山路さびしきそらね鳴らん  
(ママ)

(\*初句「なれもまた」)

元文四年<sup>巳</sup>三月四日

寄花思故人

咲花も衣としのべもろともになれしまどゐは春のむかしを

三月十八日

藤松樹花

かねてよりちとせのはるの花かづらかけていたけき松のふじ波

探題

海上雲

隙もなき青海原やおほ空の雲にかけたりおきつしら波

九月十八日

紅葉処々

よそに見る葛城やまのもみちより立田の秋の色やとはまし

探題

寄地祝

ときつ風枝をならさずつちくれもうごかぬ御代はかぎりあらじな

徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

元文五年<sup>庚</sup> 申二月十八日

橋辺柳

ゆく河の水も緑りに染かけてやなぎ色なる春のいたばし

探題

早春海

のどけしやけさは霞も四方のうみ波た、ぬよの春の初風

三月十八日

花契万春

かざ、なん万代かけていとざくらくる春毎の花の色香を

寄款冬恋

山吹の花にならへと袖ぬる、思ひは色に井手の玉みづ

右二十首一卷

月光院様御詠歌 御当座

十二月十一日

早春霞

春たつとみねのまさか木いつしかに霞なれぬる天のかぐ山

延享四<sup>卯</sup>年正月十一日



心静酌春酒

霞くむ袖ものどかにめぐる日の光さしそふ春のさかづき

二月十一日

霞中帰雁

なきて行声をしなへに見おくれれば霞にきゆる雁の一つら

忍不言恋

しられじといはがき沼のいはでわが思ひの玉藻みが、れてのみ

挿頭梅

もてはやす心をしらば梅のはな千とせも匂へ春のかざしに

花盛

おくまでや咲かさぬらん白妙の雲にくもそふみよしの、花

新樹風

さそはれしはなの木ずゑもあと、へば若葉にのこる庭の朝風

五月十一日

連日五月雨

いつはれん雲も日数もかさなりて軒ばふり行きみだれの空

寄下草恋

あまだにもからぬぞつらきわがそでの波の下草見るめなければ

名越祓

もろ人の心々にみそぎしてながすはをなじあさの大ぬさ

九月十一日

月照滝水

石ばしるおともさやけき秋のよは月におちそふ滝のしら糸

対菊延齡

仙人の千とせときくのはなになれ色かにめで、をひをかさねん

十二月

祝言

とよくにの君にひかれてもの、ふのてをさへふれぬま弓露けき

延享五<sub>辰</sub>正月

春風不分所

天下あまねき春の風なればなべてのどかにふきわたるらむ

(題なし)

いつしかとかすみそめつ、野も山もみどりにかへる春は来にけり

柳露

玉ならばぬきもとめなん青柳のいともてむすぶよるのあさつゆ

三月十一日

風静花香

さく花の木ず糸のどかにふきくるやそこはかとなく匂ふ春風

違約恋

たえせじと契りし中の飛鳥河湫はせとなる人のこゝろは

夕鶯

いり日かげのこる木ず糸にうぐひすの鳴音も匂ふ花の夕ばへ

待恋

こぬ人をうらみながらもまつのかどよしさはあけよ思ひこめなん

五月十八日

盧橘薰簷

植おきし花たちはなの宿からや軒端も匂ふ春の夕風

不留恋

やすらはでひきかへるべき小車のなに中なるにめぐり来にけん

(\*四句目「なに中々に」)

初郭公

はつねぞと我はきけども時鳥まつたが里を名のりきぬらん

泊郭公

き、あかすなみのまくらに時鳥ながなく声にうきねわすれて

九月十一日

秋明月

すみまさるあきなりけりな山のはの雲をのこして出る月かけ

寄下草恋

身のうさにかねなばかれよしる人もなみだの袖の露の下くさ

挿頭菊

今よりの千とせの秋をかざ、なんちるてふことを白菊の花

菊延命

下露のながれをくみて老せじと菊の千とせのよはひのばへん

霜月十一月

竹間雪

よのほどにつもりにけりなくれ竹の千尋のかげも雪の下草

鶴契齡

おのが千世をかさねてちぎれわが宿の松もなれきし鶴の毛ごろも

関路菊

うつり行日かけはのきにさしながら木のはしぐる、音ぞさびしき

寛延二年正月十一日

湖上霞

から崎のまつもかすみに、ほてるや志賀の海山春をしるらん

山中雨

柴人の袖もしとゞにぬれにけり山路ばかりや雨のふるらん

三月十一日

名所花

よそに見て春やすぎなむそのなよに高天の山の花の盛を

寄柏木恋

あとたえしのちこそおもへもとかしはもとの心のかれんものとは

野早蕨

これも又をりをわすれずかすむ野にもえいでけりな春のさはらび

松上藤

千とせさくまつのかざしに咲かけて常盤に匂へ春の藤浪

久愛瞿麦

年毎にいはまなきよりやしなひて露さへいとふなでしこの花

隔関恋

とゞめばやうきな思へばはゞかりの関のあなたに通ふこゝろを

新樹濃

しげりあふ木かげぞくらきわかば山うすきとききもおなじみどりに

夏月涼

夏の夜のかしより秋のかよふらしは、るすゞしき月の下かぜ

九月十一日

羈中擣衣

ちたびうつ音こそむせべ夕暮の霧よりもるゝ里のきぬたは

\*題「霧中擣衣」

寄草花恋

ならべ人香をとふ野辺の藤ばかまひもとく秋のはなの心に

月前風

雲たえて空すみまさる秋風の身にしむ月におもふ草なき

月前旅

かりねせむやどりもとはじ澄空の月をともなふ野はらしのはら

霜月御会納

鷹狩日暮

あしたよりたかひきすへてけふの日も夕しもはらふ野辺の狩人

寄世祝

あふげ人月日をきみのみこゝろにめぐら<sup>み</sup>のかげのあきらけきよを

初冬時雨

はれくもる空にもしるし神無月けふより冬のはつしぐれとは

残菊

おひせじのともとや残る百草は枯行冬もしらぎくの花

午  
正月十一日

鶯是万春友

をのが音をやを万代もともなはむわすれず来なせ春の鶯

同日当座

立春霞

いづる日もかすみそめつゝなべてよに春たつけふの空のゝどけさ

帰雁連

幾空もつばさならべて行空の霞をわくる春のかりがね

三月十八日御会

藤花遶松

ふかみどりはひまつはれて咲藤の花の浪こそ松の一もと

寄春恋

思ひこそいやまさりけれ春の夜はおぼろの月もつらきながめに

右五十五首一卷

月光院様御詠歌

寄新恋

ならしばのなれぬ心はつらけれどざりとて人を思ひかけめや

是ハ御自染御短冊家蔵

\*題「寄新恋」

梅薫風

おなじくははなをもさそへ匂ふ香のあるじゆかしき梅の下風

霞始聳

のどけしな棚引そめて山まゆのおもかげうつる春の霞は

\*題「霞聳」

五月郭公

ほとゝぎすをのが時とやさみだれの雲の□□<sup>(そを)</sup>たにふり出てなく

寄戸恋

かならずとまつのとほそのいたづらにさらでこよひもあけたの空<sup>(ママ)</sup>

秋鳥

身にしむは野ざはの水をかきすてゝしぎたつあとに残る秋風

夏夜月

いはまゆくかけ見るほども夏のよの月にすゞしき庭のまし水



江春月

さしよするなみの小舟も春のよは霞のそこにみしま江の月

夏草滋

かる人も夏の、道は絶にけり秋まつ草のしげりあふころ

月似鏡

すむ空の秋の光にみが、れて鏡をうつす月のさやけさ

題しらず

わすれめやひかふる袖にくろかみのこぼれか、りし人のおもかげ

旅泊波

さなきだにしほる、床のかち枕き、もならばぬ浦波のこゑ

春舟

きよみがた春は浪路のほのくと霞のおくのみほのうら舟

表に延享元年三月十八日当座

春山朝

けさよりはとをやままゆのうす霞いづる日影(も)□匂ふのどけさ

これは時々当座短冊にしるしあり

右十四首

総計二百十七首

重複二首  
全数二百十五首

徳川家継生母・月光院詠『車玉集』の翻刻と解題

二位尼公釋子月光院殿は有章院殿の御母なり。万の業にさとく、諸の道に心をとめ玉ひし。中にも敷島のやまと歌をふかくたうとみたまひて、享保十九年より冷泉の門に入給ふ。わかのうち波いく年かけて、都あづまの便、常にたえず。

宝曆二のくれの秋、枕の露にかくれ給ふ。われと法の月光あきらかに、正念の臨終とこぞうけたまはる。かたはらの女房に御ゆいごん有て、なき後は詠草をはじめ、歌の筆につきての墨はことごとくもとの泉にかへし侍るべきとの御あらましとて、其冬の便になくく局たちよりとりそろへてこされぬ。ながき御志を感じ思ひて、文庫にながく納めつたへんと思ふかずくくの巻々、このまゝに納をかんは、中々にのちくくのはからひとおほつかなければ、あとの尼たちにたづねあはして後、御詠草御点削のまゝをうつしとりて、御自草の巻々は、弟の僧宥澄証僧正の仏場にてひそかに灰になし、思ふゆへあれば月光菩薩の尊像をその灰にて作り、三年の御忌とひたてまつらんがため、六条の局の、尼になりて兼源院といふによす。

二百余の巻々ことごとく三年がうつにうつさんと思ひしかど力たらねば、先故大納言どの御添削の分をやうくくうつして造仏供養す。愚に墨つけしは、心しづかに書うつし灰になして、猶造仏の影をとげむと思ふありし。御いみ名の字によせあれば車玉としるしつけ侍る。車の光といふ心なり。

三位の尼うへの歌と書しは、御執心ふかきよ、をしやんごとなき御前にて申もらせしかぞ、撰集などあらば三位尼とやしるすべきとうけ給る事もあればかく書しるす。撰集の事、御存生の時、こゝろにこめ給ひし事もあればせ□めて尊霊をなぐさせたまつたらんと端にかく。御自草御清書の三冊別めにあり。造仏の事はくわしくおくにしろしあらはす。

奥書

六月十九日、真乘院僧正のもとにつけて供養し、かの仏場にて他の人をのぞき、師弟從僧三人のみ灰とのなし侍る。けぶる間は経よみ供養をとく。こなたよりをくりし供養文、

鶴林必滅の夕のけぶり、鷲峰常住の暁の雲とたなびけり。今此卷々を紅塵となすは照覽の恐もあれど、かくてのこしをき俊々しみの巢となりはてんほどもしからねば、あらたにうつしてかれをながく納のつたへのつたへ、これをいま真乘院の清淨にて供養したてまつる卷の数ことごとくとおもふに、筆かなはざれば、いまだうつしとげず御忌すでにちかし。造仏をいそぎおもふゆへに、先この百卷余を封じこめて供養し、すなはちかの守寂清淨の地にて法灯をとつてこがす紙は菩提地のごとなり。墨は功德地の水にながれ、不朽の言葉長くのこり、不滅の塵灰久しくとまつて、造仏供養むなしからざる事を願ふ。

造仏成龍月光尊一体、兼源院尼のもとにつれ侍る。よろしくはからひたまふて、ながく廻向追慕、即正菩提をとぶらひたまふべし。

宝号をいたゞく七首

くもりなき心によどす法の月光やいとゞてりまさるらん  
はる、夜のそらを心の法の月光りあらたにあふぎてぞみる  
くれの秋さそひし雨の法の月光と、もにさぞてらすらん  
うつしをく千々のことのはいつまでもながき遺物と家ぞにのこさん  
ほつ願もなれる三年のあと、ひて造仏にそふることのは

造仏の功德平等のことの葉とともにささせぬ利益たのまじ  
ちらさじとこがすことばの巻くもつゝに召ん成仏ぞにかし

前中納言為村

宝暦四年秋

(別筆)

有章院殿御実母

月光院殿

於喜世之方勝田備後守典愛娘  
宝暦二年九月十九日遷葬増上寺

〔付記〕

- ・ 本稿を成すにあたり御尽力下さいました各機関に心より御礼申し上げます。
- ・ 本研究は JSPS 科研費 21K00280 の助成を受けたものです。